

人が人を殺してはならない

語り手 久保 玉子

東中野五丁目

華やかな時代

あんまりおてんばで、しょっちゅう男の子をやつつけて帰ってくるもんだから、お祖父さん、お婆さんが心配して、日本舞踊を習わせたんですよ。私は十七歳の時に国鉄に入社して、電車の中で発行する切符の審査の仕事をしていました。たまたま五日と六日は休みで、五日は紙屋町の病院へ踊りの先生と慰問に出掛けました。よく軍隊とか病院の慰問に出掛けました。

五日は午前八時には用意があるので病院に行っていましたからね、一日遅かったら死んでましたね。その日は化粧をして着物を着て。あの時代にきれいな着物を着て歩いてた人はそういなかったですね。母の実家が裕福な家でしたから着物はたくさん持ってきてた。それをアメリカから送ってきた最新鋭のミシンで洋服を縫ったりしてね。

父は貿易関係の仕事をしていたので、ロスとかハワイとかよく知っていて。ロサンゼルスには六年くらい居たんでしょうかね。日本への最後の船で帰ってきたんです。アメリカの様子は

よく見ていましたから、戦えば日本が負けることはわかっていましたね。でも外でしゃべると憲兵隊に連れていかれるから、家の中ではしょっちゅう「絶対これは負けるよ」って言っていましたよ。資源も何もない国が、神風が吹くなんて迷信を信じてる方がおかしい。覚悟をしておかないといけないって言うてましたよ。

物がないうちに、アメリカから反物をたくさん送ってきたり、ブドウや果物も送ってきたし、いい暮らしでしたよ。チョコレートなんかも送ってきて、まわりからうらやまれましたよ。父は二代目でしたから、父よりもお祖父さんが立派な人でした。父は戻ってきてからは、おじさんが軍の偉い人で軍の調達品をもらってきて、生活していました。

あの日

被爆した何日前に、うぶぎ宇宙品に用があつていったら、アメリカの飛行機がビラ巻きをしていました。拾って呼んでみたら、広島市民の皆さん避難してくださいってというような事が書いてあ

って、憲兵隊が来てわーっと持って行ってしまった。

毎日びくびくしていましたよ。ああ今日も命があったって。

死ぬのが当り前でしたから。あの当時みんなそうでしたよ。死んだ人がバカを見た。死んだ人は気の毒ですよ。真面目な人は自決したりかわいそうでしたよ。生きていれば何とかあったのに。

授業で竹槍の訓練とかありましたけどね。やる気がなくて。

こんなことやってるようじゃ日本は負けるわよって思ってたから、バカらしくてさぼってばかりいて、よく先生に叱られました。

そしてあの日、用事があって千田町の友達の家に行っていて、トイレを借りて入って、ちょっとしたらピカッてきてドンって音がしたんです。その時、窓が反対側に倒れていたら死んでましたよ、下敷になってね。窓がちょうど上になったんです。その時はもうどうなったかわかんない。気を失ってますものね。ピカッて光ってドンといったら、もう真っ暗闇なんです。

だから「ああもう夜かなあ」って思ってたんです。そして目が覚めてみると光が差し込んで、その間だけ時間がたつたかわからないですね。光が差し始めたから、走り出したんですけど、もう暑くて、暑くて。表へ出たら人がバタバタ死んでるんです。皮膚が、ぼろ布みたいになって、体に垂れ下がっているんです。洋服も半分くらいしかついてないしね。み

んな幽霊みたいでしたね。でもそんなこと全然怖くないんですよ。その時は無我夢中でしたから。

それからずうっと歩いて家に帰ってね、そしてまた出ていってみようかなと思ったら、幼稚園、小学校とも一緒だった仁井佐枝子ちゃんにあつたんです。彼女の職場は確か爆心すぐ側で、「大丈夫だった」って聞いたたら、「何とか帰ってきたわ。元安橋から飛び込んだんだけど、どの辺歩いて来たんだかわからない」って言うんですよ。「まわりの人も一人沈み、二人沈み、だんだん沈んでいって、私だけが助かって帰ってきたのよ」って。そこでその子に会ったのが最後ですね。

十六日の朝、母親に起こされていってみたら死んでいましたから。「夜が明けたら皆によく言ってるね」と言ってるって亡くなったそうです。千田町の友達とも二度と会えませんでした。旭町の家へ帰ったらおじいちゃんが居たんですよ。仏壇に灯明ともして拝んでいたんです。「ただいま」って帰ったら、「足があるの。もう全部だめだって聞いたから」「足あるわよ」って言ったら、「ああ、本当だ。良かったねえ」って。十八歳のときでした。

被爆した日は、第二の新型爆弾が来ると言うデマが飛んで、あるもの持って旭町のすぐ側の丘に逃げました。その日は蚊帳を持って行って、木に掛けてむしろを敷いて寝ました。沢山の人が逃げてきて「熱いよう、痛いよう。」とその辺うめき声だら

けでした。父は器用な人で四畳半くらいの家を作って、終戦後もそこでみんなと暮らしました。

家族のこと

父は三人兄弟の次男で、下の叔父さんの死体を私と父は探し歩きました。新型爆弾ってことがわからないでしょう。ピカドン、ピカドンって呼んでましたけど、その時は放射能の影響なんて事は分からなかった。くすぶって、もう臭くて臭くて、暑くて暑くて。その中を探したけど、叔父の行方は分からないんです。今だに。

被爆したときの家族は、お祖父さんと両親と妹と弟。戦後もう一人妹が生まれました。母は昭和五八（一九八三）年に亡くなりました。自宅で被爆したのはお祖父さんと母と妹、弟です。父は宇品の軍で、似島へ行っていたんですね。宇品の栈橋のところまで爆風に飛ばされ海に落ちちゃったんですね。

平塚町に父の従兄弟のおばさんの家がありました。正夫ちゃんという下のお子さんが建物の下敷になって、助けようにもどうにもならなかったようです。家にもよく遊びにきてて、いい子でね。おばさん、おにいさん（おばさんの息子）はポロポロになった自転車で私の家まで逃げてきたんですけど、おにいさんは何日か経って亡くなりました。おばさんは今九州にいますけど、四〇歳代で目が見えなくなりました。

母は六人兄弟の上から二番目でした。次男の叔父さんは大本

営で仕事をしていて、少しの火傷ですんだんです。大本営にいて生き残ったのは二人だけだそうです。今でも健在です。

原爆にあってから

被爆して自宅に戻ってから、気分が悪かったんですね。それまではいつも元気で、気分が悪くなる事って一つもなかったんですけどね。その内に、一月もたたないうちに、髪が抜けるのがひどくなって、分からない高熱が出るんですよ。それが三年くらい続いて。もう原爆で死ぬのかしらって思ったけどね。まあ今まで生きてきました。戦後生まれた、被爆二世の下の妹は丈夫に見えて弱いですね。

結婚のときは被爆者を意識しなかったけど、子供ができた時は怖かったですよ。影響が出るんじゃないかしらって。おかげで二人とも元気ですから良かったなあと思いますよ。

人の前では被爆者って言わなかったんですね。ただ東京に来たときに、高円寺の駅長さんがね、火傷しているから「どうしたんですか」って聞いたたら、「原爆でやられたんだ」って。「あら私も」って言ったたら、「どこにいた」って言うから「私、国鉄にいた」。駅長さんは「国鉄の寮でまかないの女の人がね、岡山の白桃食べていきなさい。一分や二分どうってことないでしょう」って言われて、食べて助かった」って。だからその彼女に命拾われたようなものだっていってましたよ。それでなかったら道を歩いていて死んでたところだったって。広島の方

は皆死んでますよって言ってましたよ。

それから「あー、原爆」って私の事呼んで。「何言ってるの駅長さん、自分だって原爆じゃない」って。それから平気で言えるようになってね。それまでは隠してましたよ。被爆者だって事は。なにか偏見で見られるような感じがしてましたから。

広島に帰って、平和記念式典に出るたび体がおかしくなるんです。いつもあの日と同じものすごい暑さでね。今年もそうだけど、九年前に行ったときも熱が出て、自分の体じゃないみたいで、夢遊病者みたいになって。

原爆資料館へは二度ほど行きました。あんなもんじゃない。もっとすごいですよ。私たちが核兵器に反対してるのはそんなんです。

今は水爆とかもっとすごい爆弾が出来てるけど、日本に落とされたら、この国は無くなりますよ。人も何もかも消えちゃうんだから。絶対核兵器は無くさなきゃいけない。人間が人間を殺しちゃいけないですよ。生きてる間だけでも戦争が無けりゃいいね。



聞き書きを終えて

広島で原子爆弾を被災し、苦勞した人生を送られたそうだ。

その話にはただ黙ってお聞きするのみだった。特に結婚して妊娠され、被災した自分・生まれてくる子供が「大丈夫なのか？」「大丈夫なのか？」との思いで誕生までの十か月間、心配のし続けだったとのこと。人にも話せずそれは大変なものだったと思う。その精神的な苦勞は私達にははかりしれぬものが有ったと思う。

現在、色々な事情で单身、中野で生活しておいでとのこと。頑張り精神でこれからも元気で生活して行かれることを願っております。

内田新次

明るく、たくましく、したたかに。それが久保さんの印象です。私の好きな言葉でもあります。私たちの世代は、高度経済成長期に生まれ育ち、いわゆる使い捨て時代からリサイクルの時代まで国民総中流意識の中で、とりあえず何の不自由もなく平和ボケと言われながら育った世代です。でも戦前、戦中、戦後と青春時代を激動の中で過ごされた体験は、久保さんが笑っ

て話せば話すほど、私の胸にずっしりと重みを感じるものでした。「真面目な人は自決した。生きていけば何とかなったのに。」その言葉どおりだったかもしれない。でもそう言うご自身も「被爆者」という現実を隠して、生きざるをえなかった戦後。「人間が人間を殺しちゃいけない。」その言葉の重みを、戦争を知らない私たちが今受け継ぐ番だと、また思いを新たにしました。

多田由紀子

今回、この聞き書きボランティアに参加して、僕は、原爆のもたらした被害、また、人々の悲しみ、怒りなどを知りました。聞き書きをしに訪問した時、被爆された方の話を聞いていると、そのつらさが、ひしひしと伝わってきました。そして、「原爆なんてもう必要のない、争いのない平和な世界。この地球がそういう星になってほしい。」と強く思いました。

ふだんあまり考えることのない原爆について、これほど考えさせられたことはありませんでした。

「日本は平和なんだな」と思いながらも、「この戦争の事、原爆の事を忘れずにいなければな。」と思えました。

中学生・男子